

稲作の基礎について II

J A 福岡市東部 営農生活課

①品種と株間・莖数について

- ・「条間」：田植え機の爪の間隔で、田植え機の進む方向と直角方向の横の間隔
- ・「株間」：田植え機の進む方向と垂直方向の縦の間隔

基本的な考え方として、山間部で冷水がかかる圃場では密植に、平坦地ではやや疎植にするのが一般的です。

更に、品種による違いとして、極早生・早生（夢つくし等）の品種ではやや密植に、中生・晩生（ヒノヒカリ等）の品種はやや疎植にすることが多いです。

出穂期や収穫期が遅い品種は、疎植にすることで受光体勢が改善され、登熟が高まり、トビイロウンカや紋枯病等の病害虫の発生が抑制されます。

これをふまえて、当 J A の品種別の基本的な坪当り植付株数並びに株間は下記のように設定しております。

品種	夢つくし	元気つくし	ヒノヒカリ	ヒヨクモチ
植付株数	60 株	60～50 株	50 株	50 株
株間	18.3cm	18.3～22cm	22cm	22cm

- ・「有効分けつ」：分けつした莖で穂となる莖
- ・「無効分けつ」：穂とならない莖
- ・「中干し」：田んぼから水を抜いて、5～7日間乾かすこと

【目的】：①土に酸素を供給して有害物質を放出し根の活性を高める。

②水が切れることで稲が窒素を吸えない状態にして無効分けつの発生を抑制する。

③土を固めることで倒伏を防いだりコンバイン作業をしやすくしたりする

田植後、分けつが増えて株がしっかり張ると見かけは良いですが、分けつを増やしすぎても「穂とならない莖＝無効分けつ」が増えるだけです。

下記の株当り目標莖数が確保できたら、中干しを行い、無効分けつの発生を抑えましょう。

植付株数	60株	55株	50株	45株
株間	18.3cm	20cm	22cm	24.4cm
株当り目標茎数	17～19本	18～21本	20～23本	22～25本

(注) 坪当り植付株数によって目標とする茎数が変わってきます。

②出穂期はいつなのか？

- ・「出穂」：茎から穂が出た状態。(茎から籾が1粒でも出ていれば出穂。)
- ・「出穂期」：4～5割の穂が出た時期
- ・「穂揃い期」：8～9割の穂が出た時期

稲作だより等で「出穂期」という言葉を使いますが、出穂期・穂揃い期の違いはお分かりでしょうか？

現場をまわりますと、「出穂期」を2～3日遅く判断してある方が多く、「穂揃い期」を稲の止葉より穂が高く直立した状態と判断されてある方もおられます。

稲の基本的な生育で言うと、出穂始(走り穂)から2～4日程度で出穂期、出穂期から2～4日程度で穂揃い期になります。

③ノビエについて

稲の除草剤は、「ノビエ△葉期」までと記載されている資材が多く、田植後何日までに散布したら良いのか判断に迷う場合があるのではないかと思います。

参考までに、九州における「ノビエの△葉期」の目安を下記に記載します。

稲作こよみは、この日数に準じて除草剤の散布目安を記載しております。

葉齢	1葉期	1.5葉期	2葉期	2.5葉期	3葉期
田植後日数	4日	6日	8日	10日	12日

(注) 代かき2日後に田植した場合

散布目安の時期を過ぎると除草効果は大きく減少します。田んぼのノビエの葉齢や除草剤のラベルの内容を確認して、登録内容を遵守し、早めに散布しましょう。

④耕起について

稀に、田植直前まで昨年の稲株が残存している田んぼがあります。雨等の気象条件で耕起出来ないという状況は理解出来るのですが、基本的には下記の要領で行って耕起して頂きたいと思います。

I) 稲刈り後～年内に1回

越冬害虫である、ヒメトビウンカ（縞葉枯病を媒介する）の越冬場所を減らす事によって、翌年の発生軽減が見込めます。

II) 春の代かき前までに1～2回

ジャンボタニシ対策を考える場合は、1回目を行い土が締まった頃（厳寒期）にもう一度行う事によって土の中で越冬しているタニシを減らす効果があります。

土壌改良剤（珪鉄やミネラルG等）を入れる場合には、田植の一ヶ月前までを目安に施用しましょう。

⑤稲の病害虫

昨年の基礎についてIで、いもち病・紋枯病・縞葉枯病・稲こうじ病・ウンカ類・斑点米カメムシ類・コブノメイガといった主要な病害虫は説明致しましたが、今回はそれ以外の害虫2種について説明したいと思います。

【イネツトムシ】



左：イネツトムシに縋り合された葉

右：イネツトムシ幼虫

稲の葉を食べ、葉と葉を綴り合せます。特に問題にはならない害虫ですが、大発生すると減収や品質低下となります。肥料が多い田んぼや葉の色が濃い田んぼで発生が多くなります。田んぼで注意して観察して下さい。

【イネクロカメムシ】



左：イネクロカメムシ成虫
中：イネクロカメムシによる葉の被害
右：イネクロカメムシによる葉先枯れ

稲の株元において、茎の汁を吸います。稲の葉先を枯らし、株を萎縮させます。更に、穂が出すくんだり、穂が出ても白穂となり、穂が立ったままの状態となります。

『白穂になった』と言われ、確認すると、株元にイネクロカメムシがいたといった事があります。また、畦際で見かけられる事も多い害虫です。

カメムシというと「斑点米」というイメージが強いですが、イネクロカメムシは斑点米の原因となることは少なく、減収の原因となることが多いです。

—番外編—

夏～秋頃になると『田んぼに入ってみたら、白くて小さい虫がいっぱいおったこれはなんかいな？ウンカかいな？』といった電話が、年に数件あります。

待って下さい。ウンカのようにセミみたいな姿ではなく、触覚みたいな物が目立ちませんか？

それは、「トビムシ」です。悪さはしません。むしろ、稲わらの分解を手助けしてくれる虫です。間違って殺さないようにしてあげて下さい。

病害虫は、肥料が足りない時よりも「肥料が多く」、「葉色が濃い」時に多発生しやすくなります。また、**病害虫の発生程度は、風が通り抜ける・抜けない等…田んぼによって大きく異なります。**隣の田んぼの人が「病害虫はいない」と言っていたからといって、田まわりを怠ると、気付いた時には手遅れになっているかもしれません。自分の田んぼは自分で確認しましょう。